

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：13601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K22184

研究課題名(和文) 英語スピーキング能力向上を目指したコミュニケーション方略指導の実践と効果検証

研究課題名(英文) Effects of Communication Strategy Instruction in English Classes

研究代表者

山本 大貴 (Yamamoto, Hiroki)

信州大学・学術研究院教育学系・助教

研究者番号：90880344

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高等学校の英語の授業で実施できる帯活動形式の「話すこと[やり取り]」の活動とその評価方法の一例を提案することであった。まず、開発した指導・評価を進学校であるA高校で実践したところ、参加者の発話の流暢さ、理由を述べる力、相づちを打つ力、質問する力が向上した。また、アンケートなどの分析から、多くの参加者がその活動を楽しみ効果的だと感じたこともわかった。さらに、評価の妥当性・信頼性・実用性もおおむね満足できるレベルであった。一方、英語が苦手な生徒が多いB高校で実践した際には、A高校ほどの成果はあげられず、参加者の英語力等に合わせて適切に活動をデザインすることの重要性も示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語(英語)の授業において、学習指導要領に基づく指導・評価方法を用いることは重要だが、それらの具体例を、実践の効果と共に示している文献は少ない。また、学習指導要領が例示する「言語の働き」をどのように言語活動や評価のデザインに活かすべきか論じている文献はほとんどない。よって、本研究が提案する指導・評価方法や、そのデザインの過程は、高校などの英語教員や英語教師教育者の参考になるものと思われる。本研究の成果は、学会の研究大会、査読付き論文、高校の英語教員等を対象とするワークショップなどで発表し、さらに雑誌『英語教育』でも紹介された。よって、様々な立場の英語教員に示唆を与えられたと思われる。

研究成果の概要(英文)： The goal of this study was to suggest an effective teaching and evaluation method of Japanese high school students' English interaction. First, the speaking activity was developed and repeatedly conducted in A High School, where students' English ability was relatively high. Consequently, students' speaking fluency as well as the abilities to state reasons, use backchannelings, and ask questions improved significantly. In addition, the survey results indicated that most participants found the activity interesting and effective. Moreover, the validity, reliability, and practicality of the evaluation method were fairly high. On the other hand, when the speaking activity was utilized in B High School where most students were low-skilled English learners, the outcome was not as great as the one of the A High School. This result implies that the activity needs to be modified depending on learners' English proficiency level.

研究分野：外国語教育

キーワード：英語教育 「話すこと[やり取り]」の指導 「話すこと[やり取り]」の評価 言語の働き コミュニケーション方略

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高等学校学習指導要領解説・外国語編(文部科学省, 2018)は、日本の外国語教育の課題の1つとして、『「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと』を挙げている(p. 6)。また、この問題の解決を目指し、「話すこと[やり取り]」の指導・評価の留意点等を多数紹介している。しかし、学習指導要領に基づく「話すこと[やり取り]」の指導や評価の具体例を、実践の効果と共に示している文献は少ない。また、学習指導要領が例示している「言語の働き」を、どのように「話すこと[やり取り]」の言語活動や評価のデザインに活かすべきか論じている文献も、杉田(2021)などを除いてほとんどない。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究の目的を、「高等学校の英語の授業で実施できる帯活動形式の「話すこと[やり取り]」の活動とその評価方法の一例を提案すること」とした。

3. 研究の方法

[活動・評価方法のデザイン]

1) 指導と評価の一体化を目指して「逆向きデザイン」の考え方を基に実践内容を検討する、2) 学習指導要領の「言語の働き」を意識して目標を設定する、3) 10分程度の帯活動形式で類似した活動を繰り返し行う、4) 生徒に自由にやり取りをしてもらう前に、相手の発話への応答に特化した練習を行う、などの特徴を持つ実践をデザインした。概要は以下の通りである。

Day 1	目標の共有と英語表現集の解説
Day 2-4	応答に焦点を当てた練習
Day 5-10	会話練習 (Day 5-7, Day 8-10 は同じトピック)
Day 11	スピーキングテスト
Day 11 後	Reflection & Goal-setting Essay の執筆

くわえて、国立教育政策研究所(2021)などを参考に、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で生徒の「話すこと[やり取り]」のパフォーマンスを評価するスピーキングテストと評価ルーブリックの開発にも取り組んだ。その際、実用性の高い評価方法にすることも意識した。まず、スピーキングテストに費やす授業時間を減らすために、生徒が一斉に回答し、その発話の録音を教員が授業外で採点する形式を採用した。さらに、評価にかかる時間を短くするために、テスト後に、生徒に自分達の発話の録音を聞いて書き起こしをもらい、教員はそれを見て採点できるようにした。さらに、特に優れた Reflection & Goal-setting Essay を書いた生徒は、スピーキングテストにおける「主体的に学習に取り組む態度」の得点に加点することとし、自己調整能力を評価できるようにした。

[実践1]

(1) 参加者

参加者は、進学校であるA高校に在籍する2年生79名であった。スピーキング力はCEFR・A2レベルの生徒が多いと推察される。A2のディスクリプタを基に、目標を「英語で意見をやり取りできるようになる」とし、その目標達成に必要な言語の働きとして「主張する」「理由を述べる」「質問する」「話題を発展させる」の4つを選んだ。

(2) 方法

1) スピーキングテストにおける発話の録音、2) アンケート、3) Reflection Essay、の3つのデータを分析し、活動の効果を検証した。さらに、4名の採点者による4) スピーキングテストの評価結果、5) Reflection & Goal-setting Essay の評価結果などを基に、評価方法の妥当性、信頼性、実用性を確認した。

[実践2]

(1) 参加者

英語が苦手な生徒が多いB高校の1年生28名を対象に実践を行った。また、対照群として、同高校の別クラスに在籍する1年生31名もスピーキングテストを受験した。スピーキング力はCEFR・A1レベルの生徒が大半だと推察される。A1のディスクリプタを基に、目標を「英語で好きなことや嫌いなことについてやり取りできるようになる」とし、その目標達成に必要な言語の働きとして「相づちを打つ」「理由を述べる」「質問する」「話題を発展させる」の4つを選んだ。

(2) 方法

1) スピーキングテストにおける発話の録音、2) アンケート、3) Reflection Essay、の3つ

のデータを分析し、活動の効果を検証した。さらに、4) 実践を行った教員が執筆した授業日誌を分析し、教員の満足度・認識や本実践の課題を調査した。

4. 研究成果

[実践 1]

(1) スピーキングテストにおける発話の録音の分析結果

プレテスト・ポストテストにおける発話を、1) 流暢さ、2) 意見/理由を述べる力、3) 相づちを打つ力、4) 質問する力、の4つの観点で比較した結果、いずれも有意に向上していることがわかった。特に、流暢さと質問する力の伸びは非常に大きかった。以上の結果から、本活動は、参加者の「話すこと [やり取り]」の力を向上させられたといえる。

(2) アンケートの分析結果

「スピーキング帯活動は楽しかった。」という項目の平均値が4.27 (5: そう思う、1: そう思わない。以下同様)、「スピーキング帯活動は、英語スピーキング力向上に効果的な活動だ。」という項目の平均値が4.46と高くなっていた。これらの結果は、多くの参加者が、本活動を楽しみ効果的なものと認識していたことを示唆している。また、「英語表現集は役に立った。」の平均値が4.80、「自由に英語を話す練習をする前に、応答のみを考える練習をする回が設けられていたのはよかった。」の平均値が4.49となるなど、本活動の構成に対する評価も高いことがわかった。

(3) Reflection Essay の分析結果

Reflection Essay を、テキストデータ分析用のソフトウェアである KH Coder (樋口, 2020) を用いて分析したところ、参加者は自分の話す力の向上を実感していることを示す記述が多くあることがわかった。たとえば、「続く」「続ける」という語が計19回出現し、「会話」がそれらの共起語となっていることから、流暢さの向上を実感した参加者が複数いたことが示唆される。

(4) スピーキングテストの評価結果

評価者間信頼性を検証した結果、「知識・技能」は $r = .82$ 、「思考・判断・表現」は $r = .75$ 、「主体的に学びに向かう力」は $r = .77$ と、おおむね満足できる結果となった。なお、採点者のうち1人がやや特異な評価をしており、その採点者を除外すると、「知識・技能」は $r = .85$ 、「思考・判断・表現」は $r = .80$ 、「主体的に学びに向かう力」は $r = .82$ となる。

参加者30名(15ペア)の発話を採点するのにかかった時間の平均は62分であった。1クラス40名の場合、約83分かかる計算になる。少人数クラスで授業を行っている場合や、ALTと採点を分担する場合は、さらなる時間短縮が期待できる。

(5) Reflection & Goal-setting Essay の評価結果

採点者4人が32枚の Reflection & Goal-setting Essay の中から特に優れていると思うものを5つ選んだ結果、全員が選んだ作文はわずか1枚だけとなった。4人中3人が選んだ作文が1枚、2人が選んだ作文が3枚、1人のみが選んだ作文が5枚であった。これらの数値を客観的に分析するのは難しいが、一致率が高いとはいえないだろう。高評価すべき記述を具体的に示すなどの、信頼性を高める方策が必要であったと考えられる。

優れたエッセイを5枚選ぶのにかかった時間の平均は23分であった。この結果に関しても客観的に解釈するのは難しいが、1枚1分未満の時間で評価できているということであり、実用性が高い方法だと考えられる。

[実践 2]

(1) スピーキングテストにおける発話の録音の分析結果

プレテスト・ポストテストにおける発話を、1) 流暢さ、2) 意見/理由を述べる力、3) 相づちを打つ力、4) 質問する力、の4つの観点で比較した。その結果、流暢さと意見/理由を述べる力の有意な向上がみられた。一方で、実践1では有意な向上がみられた相づちを打つ力と質問する力はさほど変化しなかった。相づちを打つ力に関しては、相手の発話の内容に即した適切な表現を即興で考えて言わなければならないため、英語が苦手な参加者にとっては難しかった可能性がある。質問の向上がみられなかった原因は、疑問文を即興で作って発話することが、英語力がA1レベルである参加者にとっては認知的に困難だったからだと推察される。この結果は、参加者の英語力等に合わせて適切に活動をデザインすることの重要性を示している。

なお、対照群の参加者の発話には、1) 流暢さ、2) 意見/理由を述べる力、3) 相づちを打つ力、4) 質問する力のいずれも有意な向上がみられなかった。

(2) アンケートの分析結果

「スピーキング帯活動は楽しかった。」の平均値が3.71、「スピーキング帯活動に参加することで、「英語で好きなことや嫌いなことをやり取りする力」は向上した。」の平均値が3.59となった。実践1と比べるとやや低いですが、英語が苦手な参加者が大半であることを踏まえれば、十分な値だといえる。

(3) Reflection Essay の分析結果

Reflection Essay の記述をテーマ分析の手法を用いて分析した結果、「流暢さの向上」に関する記述が7つ、「応答する力の向上」に関する記述が6つ、「語彙力の向上」に関する記述が3つみつかった。

(4) 授業日誌の分析結果

授業日誌には、「充実感でいっぱい。新しいスピーキング活動に取り組んでもいいかもしれない。」などの、実践者が充実感を得られたことを示唆する記述がみられた。その一方で、「もう少し授業者が生徒が話す英語に対しての、リアクションやフィードバックを明示的に示せるといいかもしれない。」「語彙力がどうしても足りず...日本語から英語にする際の課題を多々感じる。文法や読解の授業を通じて、連携を図ってもいいかもしれない。」といった記述もあった。実践者が、帯活動をただ実施するだけでなく、帯活動中や帯活動以外の授業時間の指導を改善することも必要だと感じていたことがわかる。

<参考文献>

国立教育政策研究所 (2021). 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料：高等学校外国語』

杉田由仁 (2021). 『「言語の使用場面」と「言語の働き」活用ガイド』大学教育出版.

樋口耕一 (2020). 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して (第2版)』ナカニシヤ出版.

文部科学省 (2018). 『高等学校学習指導要領解説：外国語編・英語編』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山本大貴, 陣野俊彦, 戸井永貴宏	4. 巻 37
2. 論文標題 言語の働きを意識した「話すこと [やり取り] 」の帯活動 - 英語が苦手な高校生への実践 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 関東甲信越英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 211-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本大貴, 戸井永貴宏, 陣野俊彦	4. 巻 59
2. 論文標題 「言語の働き」を意識した帯活動のデザインと評価 - 高等学校における「話すこと [やり取り] 」の指導の実践研究 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Language Education & Technology	6. 最初と最後の頁 107-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本大貴, 近藤暁子, 鳴海智之, 多田ウエンディ, 吉田達弘	4. 巻 58
2. 論文標題 日本の高等学校での活用を想定したペア型スピーキングテストの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Language Education & Technology	6. 最初と最後の頁 99-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 陣野俊彦・山本大貴・戸井永貴宏
2. 発表標題 言語の働きを意識した「話すこと [やり取り] 」の帯活動 英語に苦手意識を持つ高校生への実践
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 戸井永貴宏・陣野俊彦・山本大貴
2. 発表標題 「言語の働き」を意識した帯活動のデザイン 高等学校における「話すこと[やり取り]」の指導の実践研究
3. 学会等名 外国語教育メディア学会第60回全国研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2024年3月に、高等学校の英語教員などを対象として、本研究の成果報告を兼ねたワークショップを開催しました。

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関